〈研究史レビュー〉

日本における老い・看取り・死をめぐる「迷惑をかけたくない」意識に関する研究史素描

本村　昌文*

はじめに

（声）高齢者、素直にお世話になろう

山口県でひとり暮らしをする８３歳の義姉が骨折して入院しました。関東に住む２人の娘が交代で飛行機で帰省し、付き添いをしました。退院後も食事の準備や買い物などをしています。

少し落ち着いた頃、義姉から「子どもたちに迷惑をかけたくない」という言葉が頻繁に出るようになりました。交通費のほか、子どもたちにも家族があることが気がかりで「迷惑」という言葉が出たのでしょう。（以下略）

この資料は『朝日新聞』（2018 年 2 月 17 日）の「声」の欄に掲載された 72 歳の女性からの投稿である。義姉が骨折して入院し、遠く離れた土地に住む娘たちが交代で実家にもどりお世話をするという状況において、傍線部にあるように義姉の口から「子どもたちに迷惑をかけたくない」という言葉が出てくるようになったと記されている。

もうひとつ、例を挙げよう。厚生労働省によって実施された「平成 29 年度　人生の最終段階における医療に関する意識調査」において、「どこで最期を迎えたいかを考える際に、重要だと思うこと」という問いについての回答である。

【一般国民】
・家族等の負担にならないこと：73.3%
・体や心の苦痛なく過ごせること：57.1%

【医師】
・家族等の負担にならないこと：72.6%
・体や心の苦痛なく過ごせること：72.5%

* 岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科

・経済的負担がないこと：55.2%

【看護師】

・自分らしくいれること：76.7%

・家族等の負担にならないこと：76.6%

・体や心の苦痛なく過ごせること：76.2%

・自分らしくいれること：69.9%

【介護職員】

・家族等の負担にならないこと：80.4%

・体や心の苦痛なく過ごせること：73.6%

・自分らしく入れること：70.8%

ここでは「迷惑をかけたくない」という表現ではなく、「負担にならないこと」という表現が使用されているが、一般国民、医師、介護職員、いずれにおいても「家族等の負担にならないこと」が第1位である。看護師のみ「自分らしくいれること」が第1位であるが、第2位の「家族等の負担にならないこと」との差は0.1%である。

以上の資料に象徴されるように、現代日本では、老い・看取り・死に直面、またそれらのことを考える際に、多く人が「迷惑をかけたくない」という意識を抱く。「迷惑をかけたくない」というだけでなく、「負担をかけたくない」「お世話になりたくない」「面倒をかけたくない」など表現は多様であるが[1]、いずれも他者に何らかのマイナスの負荷をかけることを厭う意識である。そして、こうした表現は老い・看取り・死に関連する新聞記事、雑誌、著書、またアンケート調査などをみれば枚挙にいとまがない[2]。

このように多くの人が抱く〈迷惑〉意識に関する研究動向を整理し、今後の研究の方向性を検討することが本稿の目的である。なお、〈迷惑〉意識に関する研究動向については、大島操氏の論考がある[3]。大島氏は1960年～2013年12月19日の期間における「迷惑」という表現や意識に関する研究をカバーし、①日本語における「迷惑」の意味、②「迷惑行為」に関する研究（電車のマナー、歩きたばこ、公共の場における携帯電話の使用等の「社会的迷惑」）、③「迷惑施設」に関する研究、④高齢者および介護に関連する迷惑の表現に関する研究と4つに分類している。本稿に直接関連するのは、上記の分類のうち、①と④である。この①④の研究に加え、2013年12月19日以降の研究やこの論考では言及されなかった研究にも目を配りつつ、〈迷惑〉意識に関する研究動向を振り返ることとしたい。

1、高齢者およびケアに関連する「迷惑」意識をめぐる研究

老い・看取り・死に関する「迷惑」意識をめぐる研究の出発点として、筆者が注目したいのは、老年心理学の研究者である井上勝也氏の「ポックリ信仰の背景」という論文である[4]。こ

の論文は、多くの老人が抱く長寿願望（生の願望）とポックリと逝きたいという願望（死の願望）とが同一の老人のなかに共存しうる理由について、奈良県にあるポックリ寺と呼ばれる吉田寺への参詣動機の調査を通して分析したものであり、〈迷惑〉意識に正面からアプローチした研究ではない。しかし、この参詣動機の調査として行った質問に対する回答のなかに〈迷惑〉意識がみられることには注意を要する。

質問は 2 つなされているが、その 1 つめの質問は「何故ポックリ寺へ参詣にきたか」というものである（91 名にインタビュー）。この質問に対する回答の 93%が「中風などの病気で寝たきりになり、ひとに迷惑をかけたくないから」であり、ここに〈迷惑〉意識が表れているのである。

さらに井上氏は質問 1 の回答をもとに、「寝たきり」と「人に迷惑」のどちらがより強い参詣の動機になるのかを明らかにするため、上述の 93%の人に対して、2 つめの質問を行う。その質問は「もしあなたの家族が、寝たきりであっても少しも迷惑がらず、一日でもよいから長生きして欲しいと願い、心から暖かく看護してくれるとしたら、あなたはもうポックリ往くことを願わないか」というものであり、82%の人が「もしそうであれば、大変嬉しいが、しかし、やはりポックリ往きたい」と回答したと述べている。

以上の回答をもとに、井上氏は「ひとに迷惑をかけること」が真の問題ではなく、「寝たきり」が大きな意味を有していると指摘し、ポックリ願望とは「死によって、より良き生を保とうとする、人間としてのプライドに満ちた生、すなわち「自立して、自由と責任をもち、社会的な役割を負い、期待に応えることができる（個人としての尊厳を保った生）」という生き方への願いであることを明らかにするのである。

ここで注目したいのは、ポックリ願望と密接に関連しながら表出された「迷惑」意識が、その言葉のとおりに他者へ「迷惑をかける」ことを意味しているのではなく、尊厳ある自立した生き方を志向する意識を表しているということである。井上氏の所論は〈迷惑〉意識の分析を主眼としたものではないため、この意識のさらなる内実、また尊厳ある自立した「生」への志向との関係が問われることはない。しかし、〈迷惑〉意識はその表現されたとおりに理解されうるものではなく、その意識の裏側には別な意識が存在することを示唆する点で、後の研究にもつながる重要な論考であるといえる。

以上の井上氏の論考は、社会学の研究者である上野千鶴子氏の「生きられた経験としての老後」において、老人の抱く自己否定感の根拠として引用されている[5]。上野氏は「青年期」の「アイデンティティ・クライシス」と同様の現象が「大人」から「老人」への移行においても

生じると捉え、「老後問題」の重要性を指摘する。そして、子どもから大人への移行が地位の向上、力の感覚がともなう肯定的ものであるのに対して、大人から老人への移行は地位の低下、権利や自由の縮小という否定的なものであると述べ、そうした老人の自己否定感の根拠として、井上氏の論文を引用する。さらに、老人が否定的なイメージと結びついたのは「近代産業社会以降である」と指摘し、「老後」に否定的アイデンティティしか与えられない近代産業社会の価値の総体を問い直す必要性を主張するのである。

上野氏の論考も〈迷惑〉意識そのものに分析のメスを入れているわけではない。しかし、「老い」を否定的に捉える事例として井上氏の論考を活用し、そのうえで老いを否定的に捉えるようになるのは近代産業社会が成立して以降の特有の現象であると述べていることをふまえると、老いを否定する〈迷惑〉意識は、前近代の社会では生じない、近現代社会に特有の産物と理解されることになろう。

井上氏と上野氏の論考は、いずれも〈迷惑〉意識をストレートに扱ったものではない。しかし、老いを否定的に捉える実例として、〈迷惑〉意識が抽出された先駆的な研究として重要である。とりわけ、〈迷惑〉意識には隠された別の意識があること、また近現代社会に特有の意識であることが示唆される点に注目する必要がある。

〈迷惑〉意識が異なる別の意識と関連していることは、社会学者である藤崎宏子氏も指摘している[6]。藤崎氏の論考は、高齢者が家族に対して抱く扶養期待の内実、自立的に生きていこうとする意識の形成について調査・分析したものである。この調査では多くの高齢者ができるかぎり子どもたちに頼らず、ぎりぎりまで自分たちでがんばると回答しており、藤崎氏はこの回答にみられる意識を「自立」という表現で捉え、以下のように述べている。

> 彼らが「ぎりぎりまでがんばる」というとき、必ずといっていいぐらい、その前に、子どもたち、家族、人様、世間の「迷惑にならないように」とつけ加えられる。つまり、そこでは、「頼る」＝「迷惑」という図式が明確に意識されている。しかし、ことば本来の意味の「自立」とは、たしかに「頼る」ことを否定するものの、必ずしも他者への「迷惑」を一義的に顧慮したものではない。また英語のインディペンデンスは、「自立」「自治」「自由」を他者に侵されたくないというある種の自己防衛本能をも強調するものであるが、彼らの表現のなかにはこうした要素はほとんどみられない。[7]

ここでは高齢者の「自立」意識の分析が主眼となっているが、「自立」意識の前提に〈迷惑〉

意識があるというように、〈迷惑〉意識とほかの異なる意識との関連が示されている。さらに、日本の高齢者の抱く「自立」意識が英語の「インディペンデンス」(independence) のニュアンス－ある種の自己防衛本能－と異なる側面があることが指摘されている。

以上の検討に関連して、多くの高齢者が血縁、地縁、そして「世間」の存在を強く意識しており、「「恥」の文化といわれ、「和」の精神を強調する日本の文化的土壌のなかでは、他者の存在からわが身を守るというより、わが身を律して他者との友好的な関係を守ることのほうに重きがおかれるのは当然」と述べ、「「迷惑をかけない」という表現のなかに、こうした日本の文化的特質を読みとることができる」というように[8]、〈迷惑〉意識は日本文化に特有のものであることを指摘する。「迷惑をかけたくない」という意識が日本文化の特質が刻印されているという藤崎氏の指摘は井上氏・上野氏の所論と異なる注目すべきものである。

〈迷惑〉意識と日本文化との関係については、浅見洋氏が「集団内での役割を生きがい、死にがいとする死生観」という日本人特有の「集団的死生観」との関係を指摘しており[9]、また中山間地域における調査によって「迷惑をかけない死」が理想的な死と捉える傾向があることを明らかにし、そうした傾向を浅見氏の所論をもとに日本文化の特質であると意味づけ、適切なケアの必要性を指摘する研究もなされている[10]

井上氏・藤崎氏の論考で示唆されていた〈迷惑〉意識には異なる別の意識が隠されているという点については、医学や社会学分野から研究が進められ、〈迷惑〉意識に潜むさまざまな意識が明らかにされている。たとえば、森朋子氏・湯浅龍彦氏は筋萎縮性側索硬化症患者に人工呼吸器をつけるか否かの選択理由に関するインタビューを通して、家族の介護負担への配慮・自律の欲求・恥の感情や自尊心との関係を指摘し[11]、大島操氏は介護付き有料老人ホームへの入所者とその家族へのインタビューを通して、高齢者自身の葛藤、自己決定をしたいという意思の現れ (自律の欲求)、排除されたくないという心境であると述べ[12]、原葉子氏はサービス付き高齢者向け住宅の入居者へのインタビュー調査を通して、「自立」への志向、子どもたちの役割への期待等の意識が隠されていることを明らかにしている[13]。

以上の研究とは異なり、介護が必要な状態となり、要介護者が介護者に対して抱く「負担をかけている」という意識を Self-Perceived Burden（SPB）と捉えて分析する研究がある。SPB の本格的な提唱は、2003 年に Cousineau,Natalie らの論文によると指摘されており[14]、Cousineau らによって開発された Self-Perceived Burden Scale の日本語版の作成、日本語版を用いた SPB の実態に関する調査報告、終末期がん患者へのインタビューをもとにした SPB の具体的な内実、スピリチュアルケアとの関係などの研究が進められている[15]。

SPB という視座からの研究は、〈迷惑〉意識を可視化するスケールの開発やそのスケールによる意識の具体相の分析という新たな可能性を切り開くものであり、今後さらに深化させていく必要があろう。しかし、その際には、上述の研究においても「SPB は、文化や社会的背景に影響を受けるととらえられ、海外の構造とは異なる日本人特有の構造をもつと推察される」[16]、「日本人は周りの人に迷惑をかけないということをとても大切にしているため、ホスピスの中でも多くの患者はこのような SPB を感じている、あるいは、少なくとも迷惑をかけないように大きな努力をしていると考えられる」と指摘されているように[17]、日本と日本以外の国や地域との文化的・社会的状況の共通点と相違点への眼差しを失ってはならないだろう。

2、「迷惑」という日本語表現・語義に関する研究および新たな研究動向

前節で扱った研究は、主に老年心理学、社会学、医学・看護学、哲学の分野からなされていた。他方、「迷惑」という言葉そのものに注目すると、意味の変遷と他言語との比較研究が日本語学の分野を中心に進められている。

「迷惑」という言葉の意味の変遷についての諸研究において引用されているのが、佐藤喜代治氏の論考である[18]。佐藤氏は中世における漢語の用例として「支配」「迷惑」について検討し、「迷惑」という語を「どうしていいか、わからなくて惑う」「道などに迷う」という本来の意味で使用されており、現代日本語と意味が異なると指摘している[19]。

佐藤氏の研究以降、福島邦道氏、大塚光信氏、堀口和吉氏、横川澄枝氏、張愚氏、欒竹民氏らの研究において、キリシタン関係資料、能、狂言、日記や記録、文学作品等の資料をもとに「迷惑」という言葉の意味とその変遷について検討が進められている。以上の諸研究により、現在では、漢語としての本来の意味をそのまま使用していたのが、室町時代から江戸期にかけて意味が多様化し、現代に通じる意味が形成されたというのが通説となっている。

こうした研究動向をふまえると、現代日本の〈迷惑〉意識に類するものが「迷惑」という言葉では表現されていない時代（室町時代以前）があることになる。ただし、その場合、〈迷惑〉意識が室町時代以前には存在しないと考えるのではなく、現代日本において「迷惑」と表現される意識が、過去の日本では別の言葉で表現されていた可能性を考える必要がある[20]。とくに、上記の日本語学における一連の研究では、「迷惑」という言葉の用例を広く分析しているため、老い・看取り・死に関わる場面での用例に即して、現代日本の〈迷惑〉意識に類するものがどのような言葉で表現されているのかについて用例を収集し分析する必要がある。

以上の語意の歴史的な変化に関する研究に加え、日本語の「迷惑」と日本語以外の「迷惑」に相当する言葉との比較研究もなされている。近藤明氏・邢叶青氏は、日本語の「迷惑」とそれに相当する中国語の「麻烦」とを比較している[21]。この研究では、①原因を作る者＝加害、②加害の意図、③被害の程度という 3 点から「迷惑」と「麻烦」とを比較検討し、「麻烦」の方が加害者の範囲が広く、また「迷惑」の方が意図的な行為や人の死を伴う重大な被害をもたらす行為について使用できる条件が多様であると指摘している。

以上のような日本語の「迷惑」とそれに相当する外国語との比較研究は、前節で検討した〈迷惑〉意識の有する日本的特質を検討する研究と密接に関わる。〈迷惑〉意識の日本的特質を導くためには、言語のレベルでの比較検討をさらに進め、日本語の「迷惑」とそれに相当する日本語以外の言葉との共通性と差異を明確にするとともに、文化的・社会的な状況を比較していく必要があろう。欧米とは異なる日本文化というお決まりの図式で安易に結論を導く姿勢を見直すことが、〈迷惑〉意識に関する研究には求められている[22]。

本節で検討している「迷惑」という言葉自体の分析と前節で述べた高齢者およびケアに関連する研究とを架橋する新たな研究として、諸岡了介氏の論考がある[23]。諸岡氏は現代日本社会における〈迷惑〉意識の広がりを議論の出発点とし、「迷惑」という言葉の歴史を紐解き、「世話」「面倒」等の類語との相違を検討する。さらに、現代の社会構造に目を向け、倫理学の分野で展開されてきた「ケアの倫理」論をふまえつつ、以下のように述べている。

> このようにケアの必要から「心ならずも」生み出してしまう負担に対する人々の心情を、この上なく的確に言い表したものであることが分かるだろう。本人に直接咎や過失のない事柄までを責任の範疇となし得る「迷惑」観念は、自律的個人を構成単位として前提した社会制度の中にあって、ケア関係が波及的に及ぼすことになる精神的・経済的・社会的な負担のあり方を正確に写し取っている。[24]

現在の社会制度が「自律的な個人の間の契約関係を構成原理として前提」しているため、この前提に包含しきれない性質をもつケア関係は家庭という私的領域に押しこめられている。そして、ケアを受ける本人のみならず、ケアを提供する家族、家族が所属する職場など第三者にまで負担を及ぼしているという意識が生じさせる社会構造を明らかにし、そうした現状が「迷惑」という言葉によって象徴的に表現されているというのである。さらに、介護をめぐる状況を検討することを通して、〈迷惑〉意識が強く現れるようになったのは、1970 年代以

降であり、本格的には1980年代以降の現象ではないかと推論を示している。

諸岡氏の論考は言葉自体の特質と現代日本社会の構造との関わりから〈迷惑〉意識にアプローチした点において、高齢者およびケアに関連する〈迷惑〉意識の研究と日本語学の分野における「迷惑」という言葉の研究との両者を止揚し新たな地平を切り開く研究と位置づけることができる。氏の研究により、〈迷惑〉意識の研究を進めていくためには、高齢者やケアをめぐる文脈での考察と「迷惑」という言葉そのものの考察とを切り離すことなく、研究を進めることの重要性が明確になったといえよう。ただし、氏が「一つの推論を示すにとどまる」とされた〈迷惑〉意識が高揚する時期（〈迷惑〉意識の歴史的変遷)、さらには日本と異なる国や地域との比較検討は、今後の研究に残された大きな課題である。

結びにかえて

最後に本稿で素描した〈迷惑〉意識の研究についてまとめ、今後の研究の方向性について言及しておきたい。

〈迷惑〉意識に関する研究は、主に高齢者およびケアに関する研究として、老年心理学・社会学・医学・看護学等の分野からなされてきた。他方、「迷惑」という言葉の意味とその変遷や異なる言語との比較研究が日本語学の分野を中心に進められており、近年はこの両者をふまえた新たな地平を開く研究がなされるに至った。以上の研究を整理すると、これまでの成果はおよそ以下のとおりとなるであろう。

ⅰ、前近代にはみられない近現代の社会特有の意識（時間軸でみた特質）
ⅱ、「迷惑」という言葉の意味は、室町〜江戸期にその意味が変化し、多様化すること
ⅲ、日本文化に特有の意識（空間軸でみた特質）
ⅳ、別の異なる意識が隠されていること（意識の重層性）
ⅴ、中国語と比較したとき、及ぼす被害の程度に相違がみられること

ⅰとⅱは時間軸に沿った分析であり、近現代社会の特質か否かを検討する視座であり、ⅲとⅳは空間軸に沿った分析であり、日本文化に特有の意識か否かを検討する視座である。従来の研究をふりかえると、ⅰとⅱに関わり、ⅲとⅳとの関わりが希薄であるとともに、ⅰ〜ⅳに関わる研究とⅴに関わる研究との接点が皆無近いという課題が浮かび上がってくる。つ

まり、「迷惑をかけたくない」という表現を逐語的に理解するだけでなく、その表現に隠された別の意識を抽出し、それがどのように形成されてきたのか、また相互にいかように関連しているのかについて、時間軸に沿った歴史的分析および空間軸に沿った比較文化的考察がなされてこなかったということである。こうした考察をせずに、〈迷惑〉意識が近現代社会の特質、また日本文化の特質と断定することは難しいのではなかろうか。

さらに付言するならば、〈迷惑〉意識には、表現とおりの意味ではなく、多様な意識が包含されている可能性を考慮に入れなければ、より適切なケアも実現できないのではないだろうか。たとえば、ある高齢者が発する「子どもたちに迷惑をかけたくない」という言葉の裏側には、実は「自立した自分でありたい」という意識が隠されているとしたら、その高齢者に対して「お子さんたちはそんな風には思っていないですよ」と述べたところで、何の救いにもならないであろう。なぜなら、「子どもたちに迷惑をかけたくない」と発する当人は、「子どもたちにかける、またかけることになる迷惑」ではなく、「自立した自分でありたい」ということに意識が向いているからである。多くの人が抱く〈迷惑〉意識の重層的な構造を見極めなければ、こうしたボタンの掛け違いのようなケアがさまざまな場面で生じる可能性があろう。

今後、〈迷惑〉意識に関する研究は、老い・看取り・死に関わる現場に根ざしながら、〈迷惑〉意識の重層的な構造とその形成過程に関する歴史的研究、日本および日本と異なる国や地域における共通点と差異を抽出する比較文化的研究を進めていく必要がある。さらに、こうした研究成果を積み上げていくことによって、適切なケアのあり方の糸口もみえてくるはずである。ただし、こうした研究は、もはや一人の研究者でなしうるものではない。老い・看取り・死をめぐる〈迷惑〉意識に関する研究は、歴史的な考察、比較文化的な考察、そしてケアの現場に即した考察による成果を統合していく共同研究が必要不可欠な段階に入ったということができよう。

注

[1] こうした多様な表現について、それぞれの言葉の意味や機能を検討し、その共通点と相違点を明らかにすること自体が研究課題といえるが、以下、本稿ではこれらの表現をまとめて「〈迷惑〉意識」と表記することにする。

[2] 現代日本社会、また介護をめぐる文脈において〈迷惑〉意識が頻出していることについては、後に取り上げる諸岡了介「ケアと「迷惑」－なぜ今日の高齢者はこれほど「迷惑」を口にす

るのか」（本村昌文ほか編『老い－人文学・ケアの現場・老年学』、ポラーノ出版、2019 年）に詳しい。また、諸岡氏は在宅ホスピスケアを利用して看取りを行った遺族を対象にした調査票の自由記述にみられる「迷惑」という言葉に注目し、現代日本における死生観の特徴を分析している（「死と「迷惑」―現代日本における死生観の実情」、『宗教と社会』23、2017 年）。

[3] 「高齢者が「迷惑」と表現する状況に関する考察」（『熊本大学社会文化研究』12、2014 年）。

[4] 『ジュリスト』増刊総合特集 12、1978 年。なお、この号は「高齢化社会と老人問題」という特集号である。

[5] 『近代家族の成立と終焉』（岩波書店、1994 年。初出は「老人問題と老後問題の落差」〈伊東光晴ほか編『老いの発見 2　老いのパラダイム』、岩波書店、1986 年〉）。

[6] 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』第 6 章「高齢者の自立意識と扶養期待」（培風館、1998 年。初出は「老人の自立意識と扶養期待」〈『東京都立医療短期大学紀要』4、1991 年〉）。

[7] 同上、169 頁。

[8] 同上、170 頁。

[9] 浅見洋「日本人の死生観とケアニーズ」（『臨牀看護』33-13、2007 年）。また、自宅死を望みながら、現実的には病院死を迎えるという一見すると矛盾した終末期の状況について日本文化との関係で論じたものとして、「ターミナルに関する意識とその日本思想史的背景」（『北陸宗教文化』15－11、2003 年）がある。

[10] 伊藤智子・加藤真紀・阿川啓子・諸岡了介・浅見洋「島根県江津市に暮らす中高年者の死生観と終末期療養ニーズに関する意識調査」（『島根県立大学出雲キャンパス紀要』8、2013 年）、藤田智恵・中村順子・佐藤亜希子・浅見洋「阿仁地域における住民の死生観と在宅終末期医療に関する意識（第 2 回調査）」（『秋田大学保健学専攻紀要』23-1、2015 年）、浅見洋・中村順子・伊藤智子・彦聖美・浅見美千江「ルーラルエリアにおける住民の死生観と終末期療養希望の変容－秋田・島根の中山間地における経時的調査より」（『石川看護雑誌』13、2016 年）等を参照。

[11] 「筋萎縮性側索硬化症患者の心理－人工呼吸器装着の意思決定」（『医療』60-10、2006 年）。

[12] 注（3）前掲論文。

[13] 「高齢期の住まいの選択にみる「自立」意識－サービス付き高齢者向け住宅入居者の語りから」（『家族社会学研究』28-2、2016 年）。

[14] ベネディクト・ティモシー「迷惑をかけたくないホスピス患者とスピリチュアルケア」（『ス

ピリチュアルケア研究』3、2019 年)。なお、Cousineau らの論文は、Cousineau,Natalie、MacDwell,Ian、Hotz,Steve、Hébert,Paul. Measuring Chronic Patient' Feelings of Being a Burden to their Caregivers : Development and Preliminary Validation of Scale. *Medical Care* 41-1, 2003.

[15] ベネディクト・ティモシー氏の注（14）前掲論文は〈迷惑〉意識とスピリチュアルケアの関係について考察したものである。SPB のスケールの日本語版作成やそれにもとづく調査報告、また終末期がん患者へのインタビューによる SBP の内実の検討については、Miki Oeki, Tamiko Mogami, Hiroshi Hagino（2013）. Self-perceived burden in patients with cancer : scale development and descriptive study. European Journal of Oncology Nursing16-2、大埜美樹・萩野浩「家族介護者による身体的介護を必要とするがん患者の自覚的負担感に関連する要因の検討」(『日本在宅ケア学会誌』181、2014 年)、大埜美樹・佐々木由紀・谷村千華「終末期がん患者の家族介護者への Self-Perceived Burden」(『日本看護研究学会雑誌』40、2017 年）等がある。

[16] 注（15）大埜美樹・佐々木由紀・谷村千華前掲論文。

[17] 注（14）前掲論文。

[18] 『日本の漢語』(角川書店、1979 年)。

[19] 福島邦道「迷惑考－対訳による」(『国語国文』52-2、1983 年)、大塚光信「寸訳対感」(『国語国文』52-10、1983 年)、同「迷惑」(『国語国文』52-10、1999 年。「寸訳対感」「迷惑」はいずれも後に『抄物きりしたん資料私注』〈清文堂出版、1996 年〉所収)、堀口和吉「「迷惑」考」(『山辺道』40、1996 年)、横川澄枝「“迷惑”の意味の変遷についての一考察」(『言語文化と日本語教育』14、1997 年)、張愚「本邦文献に見られる漢語「迷惑」の受容－上代から中世前期までの用例を中心に」(『文献探究』50、2012 年)、同「困惑の気持ちを表す感情語彙の意味分析－漢語「迷惑」と和語「マヨフ」「マドフ」の接触を例として－」(『国語国文研究』48)、欒竹民 「漢語の意味変化について－「迷惑」の続貂」(『広島国際研究』19、2013 年)。

[20] たとえば、『徒然草』第 172 段には、老人の好ましい生き方として「身を助けて愁なく、人の煩ひなからん事を思ふ」(『新訂徒然草』、岩波書店、1928 年）とある。ここにみられる「人の煩ひなからん事を思ふ」の部分について、三谷榮一・峯村文人『増補徒然草解釈大成』(有精堂、1986 年）では「他人に迷惑をならないようにと考える」、岩波文庫の『新訂徒然草』の脚注には「他人に苦労をかけないようにと心がける」とあり、現代の〈迷惑〉意

識に類するものが「煩ふ」という言葉で表現されていることがわかる。また、17 世紀半ばころの資料に、盲目で体が不自由になった父親が娘に語る言葉として「我等如きの者ハ、片時も早く死てこそ、子共の苦労もまぬがるべきに、無用の長生する事よ」(『河内屋可正旧記』巻 9、清文堂出版、1955 年)、18 世紀後半に作成された『翁草』巻 173 には「唯何となく眷族に深き世話をかけず、天数尽る迄長閑に楽しみ暮して、終らん事を欲する事なり」(『日本随筆大成　第 3 期』第 24 巻、吉川弘文館、1978 年)、19 世紀後半の『読売新聞』(1881 年 11 月 30 日) には病気で働けなくなった百姓について「家内に厄介を永くかけるより生甲斐もない命なれバ一思ひに死んだ方は増しだ」という表現がある。いずれも現代の〈迷惑〉意識に類似する例と考えられるが、「苦労」「世話」「厄介」など表現は多様である。

[21] 「日本語「迷惑」と中国語「麻烦」の意味・用法の対照的考察」『金沢大学教育学部紀要 (人文科学・社会科学編』57、2008 年。

[22] ベネディクト・ティモシー氏の注 (14) 前掲論文には、北米では約 20～30%の終末期患者が強い SPB を感じるという研究を紹介している (Christine J McPherson, Keith G. Wilson , Mary Ann Murray “Feeling Like a Burden to Others:A Systematic Review Focusing on the End of Life,” Palliat Medicine 21-2, 2007)。〈迷惑〉意識と“burden”で表す意識の違いに注意を払う必要があることは言うまでもないが、単純に〈迷惑〉意識を抱くのは日本人の特徴であり、欧米人にはみられない意識であると考えることは早計である。さまざまな国・地域の人々が老い・看取り・死の場面でいかなる意識を抱き、それをどのような言葉で表現するのかについて丹念な調査が必要であろう。

[23] 注 (2) 前掲論文「ケアと「迷惑」」。

[24] 注 (2) 前掲書、37 頁。